

長寿医療研究開発費 平成30年度 総括研究報告

認知症予防を目的としたグループ回想法の記憶と抑うつ状態に及ぼす効果に関する研究
(29-33)

主任研究者 荒井 秀典 国立長寿医療センター
分担研究者 細川 彩 藍野大学

研究要旨

平成27-28年度研究開発費(27-19)の助成を受けた主任研究者による先行研究において、認知症対策を目的とした3ヶ月間の定期的なグループ回想法による介入を行い、高齢者のQOL、認知機能、記憶への影響を検証すると同時に、グループ回想で得られたナラティブデータの内容分析を行った。その結果、QOLにおける介入後の変化は見られなかったが、認知機能と記憶遂行課題において有意な改善がみられた。そこで、本研究では、抑うつと認知症の関連性があることに着目し、QOL尺度に代わって抑うつ尺度を用いてグループ回想法の効果について検証した。

同時に、回想のナラティブデータの内容に関してカテゴリー抽出を中心に質的に分析を行ったところ、頻繁に出現するカテゴリーから高齢者の語りにおける特徴が示唆された。本研究では、ナラティブデータの質的分析で得られた内容に基づいてグループ回想法実施方法を考案し、その効果についても検証した。

主任研究者

荒井 秀典 国立長寿医療研究センター

分担研究者

細川 彩 藍野大学

A. 研究目的

本研究では、高齢者を対象とした認知症対策としてのグループ回想法の効果的な実施方法を科学的なエビデンスに基づいて開発することを目的に、無作為に対象者を割り付け、高齢者の語りの特徴に沿ったグループ回想法実施方法が認知機能及び記憶や抑うつ状態に及ぼす効果を検証する探索的な研究を行った。

B. 研究方法

2年間全体について

本研究では、平均寿命の短い自治体において、地域に在住する高齢者を対象としたグループ回想法の効果的な実施方法開発を目的に、回想法実施の際の教示の効果について検証した。自治体との協定締結後、地域在住の高齢者を対象に説明会を開催し参加者を募りグループ回想法を実施した。研究参加への同意が得られた者を対象に、考案した実施方法の下実施されるグループ回想法に参加する群とコントロール群に割り付けた上でグループ回想法を実施した。実施にあたり、数か月間にわたる定期的な介入を継続させるためには参加希望者を介入群とすることが適切であり、希望しない対象者を含めたサンプルから介入群を無作為に抽出し確保することには限界があると考えられたため、バイアスが生じる可能性を踏まえた上で、非ランダム化対照群設定試験を行った。

認知機能検査及び記憶検査と抑うつ尺度を含む①研究開始前検査を実施し、その後定期的なグループ回想法による介入期間を挟んで②研究実施中（グループ回想法前半終了後と後半開始前の間）、③研究終了後（グループ回想法終了後）と、合計3回の検査を実施した。

平成29年度について

本年度は、倫理・利益相反委員会への申請を行い、承認を得た。承認後に、対象自治体との締結を取り交わし、その後、市広報誌、回想法講座説明会、ポスター掲示及びチラシ配布により研究参加者を募集し、説明会を実施した。その後、説明会への参加者から本研究の対象者を確定した。

また、先行研究で得られたナラティブデータの質的な精査を行い、グループ回想法における高齢者の語りの特徴をカテゴリーに基づいて抽出し、当該領域における学会で発表を行い内容分析の方法確立と実施方法考案にむけて検討を行った。

平成30年度について

本年度は、20週間にわたるグループ回想法による集中的介入を実施した。回想法は小グループ単位で定期的にも実施した。実施方法により対象者を、作成した教示による回想法先行実施群と一般的な実施方法先行群の2群に割付けした。介入前、介入中、介入後に認知機能、記憶、抑うつ尺度を含む検査を実施した。

研究実施中に得られた中間結果については、当該領域における学会で発表を行った。

(倫理面への配慮)

本研究は、倫理・利益相反委員会へ申請し、承認後に研究を開始した。

承認後、調査実施に際し、調査対象者の尊厳と人権を守り、調査対象者が不快な思いをしないよう努めた。調査に先立ち、研究目的と調査内容を口頭及び書面にて十分に説明の上で、理解されたかどうかを確認し、同意を得た。また、調査対象者には、自由意思で参加が決定できるよう配慮し、面接を途中でやめること、答えたくない質問には答えないこと、調査結果の報告を求める権利があること、自己情報アクセス権・コントロール権があ

ることを説明するとともに、研究者は、調査対象者のプライバシーへ配慮し、調査の実施によって不利益が予想される場合には直ちに調査実施計画を中止するなどの適切な手続きをとった。さらに、参加は強制ではなく任意であることを説明し、調査対象者が調査に対して疑念を持つことなく快く協力できるよう慎重な対応に努めた。研究実施期間中に、特筆すべき問題はなかった。

C. 研究結果

2年間全体について

本研究は、健康寿命が短い地域の自立した高齢者 20 名を対象に、回想法による集中的介入を実施し、標準化された尺度を用いて認知症予防としての回想法の効果について検証した。また、先行研究で得られたナラティブデータの質的分析結果に基づいてグループ回想法実施の際の教示を作成し、その効果についても検証した。その結果、記憶検査においてグループ回想法実施後に改善が見られた。しかしながら、作成された教示に基づく実施方法と一般的な実施方法において有意差はみられなかった。

平成 29 年度について

本年度は、倫理申請を行い、審査及び承認を経て、対象地域との締結を取り交わした。その後、対象地域との協働により対象者募集、実施場所、をはじめとするフィールド整備を行った。

平成 30 年度について

本年度は、20 週間にわたる隔週毎のグループ回想法を実施した。回想法実施前、実施中、実施後には認知機能、記憶、抑うつ尺度を含む合計 3 回の検査を実施した。その結果、実施後には、記憶検査において改善がみられた。しかしながら、抑うつ状態に関しては変化がみられなかった。

また、先行研究の質的分析に基づいて作成した教示に関する効果を検証した結果、いずれの評価項目においても効果がみられなかった。

D. 考察と結論

先行研究において、グループ回想法による集中的介入では、認知機能及び記憶における有意な改善がみられた。本研究では、この結果を踏まえて、グループ回想法の効果と、グループ回想法で得られたナラティブデータを質的に精査し、高齢者の語りの特徴を抽出し、その特徴に沿って認知症対策となる効果的な回想法実施方法の考案を目指す為、作成した実施方法の教示の効果について検証した。その結果、先行研究と同様に、記憶検査において回想法のポジティブな効果がみられた。しかしながら、抑うつ状態に関しては変化がみられなかった。また、作成した教示に関しても効果がみられなかった。

本研究の介入頻度は隔週毎で期間は 20 週間であったが、より頻度の高い介入あるいは長期間の介入の条件下であれば、抑うつの状態の変化や作成された教示の効果の検証において異なった結果が得られる可能性も考えられる。また、本研究の対象者数は少なかつたこともあり、認知症対策としてのグループ回想法の有効性や作成した教示の効果を検証するためには、より多くの対象者によるデータ収集を継続し、結果を精査していくことが必要であると考えられる。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Hosokawa, A. & Tomida, M. (2018). Effects of group reminiscence focusing on sequential life review on cognitive aging. *Innovation in Aging, 2*, 929-930.

2. 学会発表

1) Hosokawa, A. & Tomida, M. (2018). Effects of group reminiscence on aging mind: Implications from content analyses on life narratives. American Psychological Association 2018 Annual Convention. 11, Aug, 2018. San Francisco, USA. (Oral / Paper Session)

2) 細川 彩、富田真紀子. 自伝的記憶に基づくライフナラティブにおける統合的解釈に関する考察 -ネガティブな出来事に関するナラティブデータの内容分析-. 日本心理学会第 82 回大会. 平成 30 年 9 月 25 日. 仙台市. (ポスター発表)

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし